

宗教多元主義と浄土教

一、はじめに

今日のキリスト教神学の一部においては、宗教的な真理は唯一ではなく、多数存在しうること、が唱えられている。いわゆる宗教多元主義の主張である。現代の社会状況を考える時、それはいちじるしく国際化し、また情報化も進んで、価値に対する考え方もきわめて多様化してきている。そのような社会的動向をうけて、世界の諸宗教においても、従来の枠組みを超えてさまざまな出会いがはじまり、また相互の対話や連携も生まれるようになってきた。その点、キリスト教神学が、かつての自己の教説のみが真理であるという排他主義をやめて、新しく宗教多元主義を主張するようになってきたのは、理由あることだと思われる。そこでこの問題について、私たち仏教、浄土教、ことには親鸞の浄

信 楽 峻 磨

土真宗の立場からは如何に考えるかということである。私は基本的に、浄土教、浄土真宗においても、この宗教多元主義の主張に対しては、賛意を表すべきであると思う。以下そのことをめぐって若干の私見を開陳することとする。

二、浄土教、親鸞浄土教の立場

日本仏教は、中国、韓国を経由して、六世紀の中頃に伝来したものであるが、仏教思想が日本に受容されるについては、伝統の日本神道の観念と重層融合しつつ流布されるという側面があった。いわゆる本地垂迹説といわれる神仏習合思想の展開である。たしかにある思想、文化が、全く異質の文化的土壌に移植されるについては、何らかの形態をもって、先住の文化状況と融合しながら受容されてゆくということは、必然的な現象といわざるをえない

であろう。その点、日本仏教は、その伝来、流布については、仏教本来の意義からすれば、その当初から、いささか屈折しながら受容され、伝播していったといわねばならないようである。

しかしながら、この日本仏教も十二世紀の中頃になると、法然の浄土教を先駆として新しい仏教理解が生まれてきた。いわゆる鎌倉新仏教の誕生である。この鎌倉新仏教の特色としての性格は選択の思想である。すなわち、ただこのことこそが唯一真実であるとして、その教法、行道を選び捨て選び取って専修していったわけである。それまでの仏教は、多様な価値を同時に包含し、また異質なものとも重層しながら雑修的であったが、この鎌倉新仏教においては、そういう雑修性を悉く排して専修の立場に立ったのである。そしてここにおいてこそ、仏教の本意がもつとも鮮活に開顕されたわけであり、またそれにおいてこそ、まことの仏道がたしかに成立することとなったというと思われる。法然における専修念仏、親鸞における唯以信心、道元における只管打坐の仏道である。その専といひ、唯といひ、只管という言葉は、まさしくこの選択の思想をもつとも端的に表詮するものであろう。

このような選択の思想については、ことに親鸞において鮮明である。親鸞は法然を継承して一切の雑行雑修を排し、「ただ念仏のみぞまことしておはします」（『歎異抄』）と主張したが、またその念仏の内実までもきびしく詮索し、選択して、「ただ信心を要とす」（『歎異抄』）とも明かした。その点、親鸞は、従来の仏教

が容認していた日本神道との重層を意味する本地垂迹思想を徹底して排除し、神祇不拝を主張した。親鸞においては浄土教はもつとも純化したわけである。しかしながら、親鸞没後の浄土真宗においては、その親鸞の本意を見失って、再び日本神道と癒着することとなり、その後の歴史的な変遷もあって、今日の浄土真宗における信心は、多分に日本神道と重層し、習俗化しているといわざるをえないようである。その意味において浄土真宗は、すみやかに開祖親鸞の立場に明確に回帰し、その選択の思想に基づいて、日本神道との癒着から明確に解放されるべきである。このことは今日の浄土真宗における伝道教化についての最大の重要課題にはかならない。

三、親鸞と宗教多元主義

親鸞の浄土教、浄土真宗の立場は、すでに上に見た如く、まったく主体的に、本願念仏、信心を唯一絶対なる究極的価値、真実として選択するところに成立するものであった。そのような宗教的な選択は、伝統的、思想的な教系に縁あって邂逅するという契機と、それに対するまったく主体的な思惟と決断、すなわち、客体的な有縁の歴史と、主体的な決断のクロスする地点において成立するものであるが、このような選択においてこそ、よく宗教的世界、仏道は開けてくるわけである。唯一絶対なる宗教的な究極的真理としての何かを選び捨て選び取るという、そういう究極

的なものと邂逅し、その一点に立つことなくしては、あらゆる世俗の相対化、その一切の価値を悉く虚妄なるものとして否定するということはできないし、また従って、浄土までをも見通しうるようなまことの仏道は成り立ちようもない。それはあたかも、ただ一本の主軸に基づいてこそ、よく車輪が廻り、またただ一点を基点としてこそ、よくテコの原理が成り立つようなものである。もしも二本も三本も主軸があったのでは車輪は廻転することは出来ないうし、また二点も三点も基点があったのではテコの原理が成立しえないようなものである。ただこのことひとつこそ真理、真実であるという、徹底した究極的な選択においてこそ、よく世俗的価値が否定され、またそれに即してこそ、よく仏道は成立するものである。

世界における諸宗教が説くところの究極的な実在、真理とは、それぞれその文化的背景に基づいて捉えられたもので、それはきわめて複雑であり、多様多岐にわたり、その真理については多元的に捉えられるべきであって、宗教的究極的な真理は数多く存在するというような発想では、とうていこの一切の世俗的価値を徹底して相対化、ないしは否定することは不可能であり、また従って、真実への道は決して成立することはありえないと思う。かくしてそこでは、まことの意味での信仰、信心というものは現成することとは不可能である。真の信仰、信心という宗教的経験は、このことこそが唯一真理であるという究極的な選択を立場としてこそよ

く生まれてくるものである。かくして浄土真宗においては、このように本願念仏こそが唯一絶対であるという立場に立つものである。とすれば浄土真宗においては、そのような自己自身の立場を保持しつつ、なお宗教多元主義をいかにして是認しうるであろうか。更に考察をすすめることとする。

仏教においては、この宇宙世界における一切の現象、存在は、すべて縁起、因縁生起として成立していると言くものである。すなわち、

「此あれば彼あり、此れ生ずるがゆえに彼生ず、此なければ彼なし、此れ滅するがゆえに彼滅す」(原始經典)

と説かれる如く、すべての現象や存在は相依、因果の關係において成立するもので、結果をもたらすところの原因(因)が条件によって決定される。そしてその原因やそれにかかわる条件がなくなれば結果は消滅するというわけである。かくしてこの世界の一切の現象、存在は、私自身の存在を含めて、すべて無常にして無我なるものであり、それは有にして無、無にして有なる、仮なる存在にはかならないということとなる。仏法を学んでその真理に深くめざめるもの、親鸞の立場からいえば、その本願念仏の道において信心の智慧をうるものは、そういう仏法の道理に照射されつつ、自己自身の存在の縁起性、無我性について深く教えられ、それにかかわる自己の我執性、虚妄性をきびしく凝視し、それに

めざめてゆくこととなるのである。そしてそこでは必然に、つねに自己存在を相対化し、空無化しつつ、自己に対する他者存在をありのままに是認し、それを尊重するという視座がひらけてくる。それは自己存在とまったく同じ価値をもつものとしての他者存在の発見、それに対する無条件的の承認である。そのことは聖徳太子の言葉でいえば、「我必ず聖にあらず、彼必ず愚かにあらず、共に是れ凡夫のみ」(『十七条憲法』)という世界である。

その点、親鸞は、その念仏、信心を選択することにおいて、古来の日本神道をきびしく退けて神祇不拝を主張し、そのように門弟に教示したが、また同時に、神祇を侮ることがあってはならないとも教誡している。このように神祇不拝を主張しつつ、またその不侮を語ったということは、再び神祇の崇拜を肯定し、そのことを曖昧にしたということではなく、神祇不拝を主張しつつも、現にそのような神祇を信奉している人々の存在そのものに対しては、それを是認し、尊重すべきであると同化したということであった。すなわち、その日本神道が説くところの究極的な真理、実在を、自己の選択した究極の真理に対等する真理としては認したのではなく、その神祇を信奉する人々の存在を肯定し、是認したのである。ここに親鸞における他の宗教に対する基本の姿勢があったのである。

四、むすび

かくして浄土教、浄土真宗においては、その宗教的な選択においてこそ、はじめてこの世俗を超えて宗教的世界が開けてくることとなる。そしてそこにこそ、はじめて仏道が成立するということにおいて、自己が選び取った究極の真理は唯一絶対なるものであって、その意味においては、宗教的真理は数多く存在するという如き発想には与しえないこととなる。しかしながら、上に見た如くに、仏教の立場からするならば、そのような徹底した宗教的な選択において究極的な真理を身にうるならば、仏教が教示するところの縁起、無我の道理にしたがって、自己自身を相対化し、自己に対する他者の存在を無条件に肯定し、それを尊重するという世界が成立してくることとなる。すなわち、ここでは自己自身が選択し信奉するところの、宗教的な究極の真理を唯一絶対なものとしながらも、しかも同時に、自己に対する他の諸宗教を信奉する人々の存在を肯定し是認することにおいて、間接的にはあるが、それぞれの宗教、それが説示するところの各々の真理、実在をいちはおうは肯定することとなるわけである。私はいま浄土真宗の立場に立ちながら、このような意味において、今日いわれているところの宗教多元主義を肯定し、その主張に賛意を表したいと思う。

(しがらぎ・たかまろ、真宗学、龍谷大学名誉教授)